
天盤の町

つきよし風桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天盤の町

【Nコード】

N5047H

【作者名】

つきよし風桜

【あらすじ】

目覚めるとそこは暗い部屋。俺が出会ったのは変なひと……微笑む事しか出来ない悲しいひと。

(前書き)

『天盤の町』は、わたしがかなり前に見た夢が元になっている作品。以前に書いたものを多少手直しての投稿です。

天盤という言葉は、その時に登場人物が言っていたものです。意味的にどうなのって感じですが……あまり気にしないで下さいな。

ファンタジーという括りにしておきますが、これってファンタジーなんだろうかね……

未熟かつ内容も微妙な文ですが、暇つぶしにでもご覧くださると嬉しいです。

では。

堕ちた……のだと思う。

だって何も見えない、何も聴こえない。

それは暗いから。そう。果てしなく、闇、闇、闇。

これじゃあ、俺が見つけられない。

俺は何処？

嗚呼。

俺は……

「おはようございます」

此処も……暗い。暗い、部屋。

目覚めた俺の顔を覗き込むのは、男性。丸ブチ眼鏡、白髪混じりの頭。目測、四十代後半から五十代前半くらい。

「……おはよう、ですか」

「そうです。時計を見て御覧なさい」

むっくりと起き上がり、周囲を見回すと。

殺伐とした部屋。

床中に散乱する紙に記された文字は、理解不能なミミズ文字。

殆ど役割を果たしていない仄かな灯り……曇りに曇った豆電球。それと寄り添うようにして、黒ずんだ天井から攣り下がるまあるい懐中時計が示す時刻、は。

8時39分、45、46……

刻は、無情にも進んでゆく。

「……わからんですが」

だって俺は現在16歳と4カ月と10日。そんな年端もいかない未成年男児に……や、女児でも同じだろうけど、だ。

この状況を理解して、何事も無かったかのように生活を営んで下さい、はい、開始。

絶対無理。

「……俺は、どうして此処に居るんですか」

「さあ」

「あの、さあ、とは……」

「私は君を町のはずれで拾っただけですから」

「拾う？ 俺は落ちとったんですか」

「ええ」

そんな……相も変わらず優しげににっこりされても、混乱は収まりませんって。

「ええと……あの、今はいつですか」

「8時41分42秒」

「ああ、時間のことでなく、何日かということでした」

「さあ」

「さあって……十分答えて戴ける質問をしたつもりだったのですが」

「さあ。私達の中には、あの日からどれだけの時間が経過したのか、覚えている者なども居ないのです」

あの日。

「あの日……とは、いつなのでしょうか」

「さあ」

さあさあさあさあ……これだけ短時間の会話で、もう4回言ったぞ。

「……あの」

「はい」

「そもそも此処、何処でしょうか」

「さあ」

はい、5回目。5度目の正直。もうこのひとに質問するのはやめよう。

俺はベッドから起き、立ち上がる。うわ、凄い埃、うわ、俺何故か土足…てか足の踏み場ねえ。

けれど、外靴を履いたままだったのは好都合。

「あの」

「はい」

「外出しても、いいでしょうか」

「どうぞ」

彼は俺の代わりに、黄ばんだ……本来は白だったのであろう、ベツドの上に腰を下ろす。埃が舞う。
にっこり。にっこりして、俺を見る。

「……じゃあ」

「ああ、そうだ」

「え？ あ、何か教えて下さるのでしょうか」

「帰って来てくださいね」

「……は」

「私のところに。いつかは、帰って来てください」

わからんです。

首を軽く傾げて、俺は白を跨いで玄関へと向かう。

あ。

と。俺は気づいて振り返る。

「あなたのお名前は」

「さあ」

「……名前もわからんですか」

「ええ」

「えーと、じゃあ……」

どうするべきかと俺は俯く。
其処に在ったのは、白。

白……しろ。しろ……

シロウ。

「シロウさんと、呼ばせて戴きます」

「どうぞ」

そう頷いたシロウさんは、にっこり。

「行ってらっしゃい」

このひとは、真顔が笑顔なんだろうか。
でも、俺はこっそりと。帰るところがあるんだ、なんて。
このひとの笑顔に、安堵を覚えていた。

二階建てアパートの最上階、つまり二階。その一室から出てきた俺は。

その黄土色のドアの前。濃紺ならぬ濃灰の天を見上げて啞然とする。

ずばり、プラネタリウムだ。

超金かった、超大規模なプラネタリウム。

地上の町とかも完全再現。

ただ……一つ違うのは、その、空が……灰色の、鉄くろがねで出来ている
という事。

つまり、町が丸ごとひとつ、すっぽりと。灰色のドームで覆われてしまっているのです。

「暗い訳だ……あんな、ちっこい灯りが点々と……」

星の数も少なかった。

均等な距離を置いて、光の粒が数個並んでいる。そのラインが、五本だけ。

こんなところ、絶対お客さん来ないだろうな。

勿論、というのはなんだけど。俺だって来たくなかったから。

俺はその場にしゃがみこみ……溜息一つ、吐いてみる。思い出すのはシロウさんの言葉。

落ちてた……かあ。

俺はひょっとしたら昔から、此処にいたのかも。なんかの拍子に頭ぶつけて記憶喪失。それで、こんなことは比べ物にならんくらい素敵な故郷を捏造^{ねっぞう}して。

なんて、ちょっと思っただけ。

俺は唇の端を歪ませた。ニヒルな笑み……なんて、まだ、出来ないけど。

「まさかね」

とにかく、このドームから出る方法を見つけないと。

俺はよつ、と。短くひとり、声を上げて立ち上り。

階段を下り、町へと走り出す。

何処へ行っても、町ゆく人は、みんなみーんなシロウさん。
顔じゃない。表情。

みんな、にっこり。

いざ踏み出してみると。

空だけではなく、町も全体的に灰色で。つまりはコンクリートや
金属尽くし。

同じ灰を指す、灰色の鉄柱が一定の間隔で並び。

住宅だって、塗装が剥けてしまったのか……みな一様に灰を剥き
出しにしている。

その灰の上を……服も、皮膚も、黒ずんだ人々。

そう。誰もが「徘徊」しているのだ。

だって、老人はおろか……否、老若男女、問わずのろのろゆらゆ
ら。

人とぶつかって倒れても、謝罪の言葉を掛け合う事も、罵声の言
葉を浴びせ合う事もせず。にっこりしたまま再びゆらゆら。目的あ
ったの歩行とは思えない。

気持ち悪い。

そして思う。

きっと、誰に何を訊いたって。俺が求めている「答え」を、得る

事なんか出来ないんだろうな。

自分の身体を抱き締めて。早足で……触らんようにしながら、とりあえず黒の群れの中に行く。

……と。暫く行ったところで。

「何アレ」

広場を埋め尽くすように。
箱。

黒く、光沢を持つ。大きな、大きな……例えて言うなら、コンビニ程大きな、箱。

鮮明な黒を持っているから、かも知れないが。

俺の眼には、そこだけが異空間のように映る。

ぶつかり合っている人々も。何故かそれには近付かない。

……爆発、しそう。

なんとなく、そう思ったから。

俺は元来た道を引き返し、シロウさんのアパートへ。

そういえばと思って。

戸の前で表札を探してみた。あったけど……これまたミミズみたいな、汚くてうっすい字。

溜息をついて。戸を引いた。

シロウさんは……暗い暗い部屋の中。さっき見た時と同じ位置、同じ体勢。にっこりも、一寸たりとも変わっておらず。

「……只今、帰りました……」

「はい」

「……お帰りとは、言ってくれんのですね」

「忘れていました。お帰りなさい」

玄関で靴を脱いで。恐らくシロウさんのものであろう、先っぽに大きな穴のあいた靴の隣に、並べる。

俺のスニーカーが、唯一の、新鮮な色。それは。輝いて見えるほどで。

だって、此処では。空も、町も、人も。色褪せて、醜くて。それでも、笑う事しか出来ない。

病気なのかな。

此処にいたら、俺も。いつかきつと。

部屋に入る。大事な紙……だったらしまつとくだろうから多分違うんだろうけど、もしそうだったら困るから。なるべく踏まんように、大股で、シロウさんに近づいた。

「外はどうでした」

「え」

彼は何も言わない。其処で漸く、問われたのだと気づく。

「……えっと……あの、個性的、だなあ、と」

俺はあたふた。シロウさんは、黙ってにっこり。

「ほんと、何か凄かったです！　ちょーっと灯りが少ないなーとは思いましたけど、あ、でも町の人はみんな笑っておいりましたし」

どうして？

「みんな……優しそうで」

どうして。

「……みんな」

どうして。

どうして笑う。

どうして笑う。

どうして笑う。

どうしてあなたは、笑っている。

「……幸せそうに……笑って、おいりました……」

どうして。
泣く。

「……どうして、笑っていらっしゃるのですか……」

「笑ってなんかいませんよ」

「……笑ってるじゃ、ないですか……」

「いいえ。泣いているんですよ」

「……はぁ？」

何言っただこの人は。思わず俺は、笑ってしまった。

「……ああ」

シロウさんは、ゆらゆらと立ち上がり。紙を踏んで、ぐしやぐしやにして……俺のところまで、やって来る。

「笑いましたね」

あ。

「忘れてはいけないですよ」

「シロウ、さ……」

眼鏡を通して俺を見る、優しい彼の眼。ロマンスグレーの瞳。人間の瞳。

彼は俺の肩に触れた。力無い手。けれども、優しい手。

「行きましょう」

「……何処へ？」

「あなたの在るべき場所へ」

「そんな……俺、帰れません……」

「大丈夫ですよ」

「……何で、そう言いきれるんですか」

すると。

「さあ」

目の前に聳えるのは、黒い箱。
シロウさんはそれを間近で見つめ。それにそっと触れて、言う。

「思い出しましたよ」

「……何を、ですか」

「此処は天盤の町です」

「天盤……」

「ええ。戦火から町を守る為に、天盤を作ったのです」

「……それが、どうして」

「天盤に守られることで、私達は、生を続行できました」

シロウさんは、黒い箱を。愛おしそうに、撫でる。

黒ずんだその手で。優しく、優しく。

「その代り……私達は光を失い、そして死を聴きました。人々を焼き尽くす爆撃音を……劫火に焼かれる人々の叫びを聴きました」

偽りの中。

生を全うし続けるものは、隣には死を携えて。

「全てが止んでも、私達は外へ出ようとはしなかった。生きる為に……生にしがみつき、永遠を勝ち取る為に。そうしたら……何故でしょうね」

そして。

日の光を忘れし者達は。

やがて。

「何時の間にか……」

「……あなた達は」

その先は、声にならなかった。

ただ、シロウさんはにっこりして。俺をその瞳に映して。

こう言う。

「天盤を、壊していただけますか」

「……へ？」

「この黒い箱は、天盤という巨大機械にプログラムした『解放機能』を司るもの……いわば、リモコンです」

「……これを使えば、天盤を、壊せるのですか」

「はい」

「天盤を壊したら……どうなるのでしょうか」

「解放されますよ」

「……信じて、よろしいのでしょうか」

「ええ」

すると。

リモコンは、黄金に輝いて。

眩しくて……俺が目を細めた、その視線の先に、現れたのは、白く四角いボタン。

それは小さい。本当に……指一本で、簡単に押せてしまいそうな程に。

「……この、ボタンを？」

「はい」

「押せばいいんですね？」

シロウさんが、はい、を繰り返したのを聞き。

俺は胸の高鳴りを感じて。鎮めようと、一度大きく、空気を吸って、吐いて。

……空気が。
死んでる。

そう、思った。

そつと、手を伸ばす。

その時。

「やめろ」

振り返ると。

「……シロウさん？」

「テンバン……コワスナ、ヤメロ……ヤメロ!!」

聞こえて来たのは別人のような声。

其処にあったのは別人のような顔。怒りと憎悪に歪んだ、醜い、シロウさんの顔。

彼は頭を掻き耨る。涎を垂らして、狂い叫ぶ。

「テンバン……コワサナイデ。コワサナイデ……コワサナイデ」

悲しみに。涙を流す瞳。

「テンバン……キボウ……コウスルシカナカッタ……ワタシノ……
ワタシタチノキボウ……ワタシノ……イノチ」

生きたい。願った事は、ただ、それだけ。
なのに。

ドウシテ コンナコトニナツテシマッタノダロウ？

失ってしまった。

デモ。

ソレデモ。

「……キエナイデ……キエナイデ……」

「シロウさん」

手を、伸ばした。

俺が触れたのは。シロウさんの、肩。

「名前を教えて」

「ナマエ……」

「そう。俺に、あなたの名前を教えて」

優しいあなたの名前を教えて。

忘れないから。

あなたが消えてしまっても。

あなたの事を、忘れないから。

「ナマエ……ナマエ……アア……」

やがて。紡ぐ、ことば。

あした。

未来を映した。優しいあなたの、大切な名前。

「……俺、天盤を壊します」

……と。

「ヤメテ……ヤメテ……」

彼の言葉が、伝染する。

彼の背後には、沢山の、彼。やめろと、永遠を壊さないでと、訴え、阻止しようとする人々。迫る手……手、手、手。

笑っていた、人達。

「……ああ」

「シロ……アシタ、さん」

「……君が、来て、良かった」

そして。
にっこり。

「偽りの中で生きていくのは……もう……」

「……君の名を」

「俺の名前、ですか」

「ええ」

俺は答え。

迫ってくる悲しみの群れ。

このままだと、何も見えなくなってしまうから……

ボタンを、押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5047h/>

天盤の町

2010年10月9日04時08分発行